Osaka University Knowledge Archive

Title	イスラム教徒における宗教と働くことの意味に関する実証的研究
Author(s)	Hafsi, Mohamed
Citation	大阪大学, 1987, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/28965
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【3】

氏名・(本籍)	HAFSI (ハフシ) MOHAMED (モハメッド)
学位の種類	学術博士
学位記番号	第 7607 号
学位授与の日付	昭和62年3月26日
学位授与の要件	人間科学研究科行動学専攻 学位規則第5条第1項該当
学位論文題目	**イスラム教徒における宗教と働くことの意味に関する実証的研究**
論文審査委員	(主査) 教授 三隅二不二 (副査) 教授 塩原 勉 教授 青木 保 助教授 濱口 惠俊

論文内容の要旨

本研究はイスラーム教への関与と働くことへの態度の関連を示唆するこの仮説を検証しようとする実証的試みである。この論文を通して使われるイスラーム教への関与（Involvement）という概念は回答者のイスラームの知識の程度と日常生活の中でイスラームの教えを実行する程度を示すものである。宗教的な関与に関する測度を得るために，次の3つの変数が個人レベルで合成された。すなわち，コラーン（Koran）についての知識の程度，ハディース（Hadith)についての知識の程度，イスラームの教えの応用の3変数である。これらを合成したスコアーをReligious IndexまたはRINDEXと呼ぶ。このRINDEXのスコアーが高い者はHRINDEX，低い者はLRINDEX，中間の者はMRINDEXと呼ぶ。

本研究の基本的な仮説は，HRINDEXとLRINDEXの間に，彼らの働くことに対する態度に与える宗教的影響の程度という点で，体系的な差異が存在するというものである。つまり，HRINDEXは，LRINDEXと比べて，働くことに価値を置き，より重要だと考えているだろうと我々は予測している。働くことの評価に関する上記の差異は，また，以下に述べる働くことに対する態度にも影響を及ぼすと考えられる。

1）HRINDEXの回答者はLRINDEXの回答者よりも，働くことを社会的義務，あるいは，社会に対する貢献と考える。後者は働くことを経済的な文脈でとらえる。言い換えれば，HRINDEXの回答者は，働くことの社会的側面を強調する一方で，LRINDEXの回答者は，働くことの経済的側面を強調すると予測するのである。

2）働くことの中心性の差異についても同様のことが考えられる。すなわち，HRINDEXの回答者はLRINDEXの者と比較して，生活領域としての働くことをより中心的に位置付けており，また，働く

ことに，より関与していると考えられる。

3）働くことのはたす機能についても同様の差異が考えられる。つまり，HRINDEXの回答者は，社会貢献としての機能，内発的な機能に価値おき，一方，LRINDEXの回答者は，収入獲得の機能に価値をおく傾向がある。

4）RINDEXの差異は，働くことに関する社会規範に対する同意の程度にも差異をもたらすと考えられる。つまり，HRINDEXの者ほど，働くことに関する規範の義務感の側面に同意し，HRINDEXの者ほど，規範の権利意識の側面に同意すると思われる。

これらの仮説を検証するため，我々は，日本在住でかつ働いているイスラーム教徒に対して質問紙調査を行なった。調査時点での日本在住年数は2年から31年であった。サンプルは男性に限られ，345名（ＣＳ）で，うち，日本人イスラーム教徒（ＪＭＳ）が110人，インド人イスラーム教徒（ＩＭＳ）が120人，エジプト人イスラーム教徒（ＥＭＳ）が115人である。また，本研究のサンプルは年齢も様々で，25歳から62歳であった。

収集されたデータは，CATDAPパッケージを用いて分析した。

このパッケージはＡＩＣ値をもとに最も説明力が大きい変数を見出し，また，説明力の順位を明らかにするの程度の差を説明する最には，最も小さなＡＩＣ値をもった変数を用いることにする。

3. 本論文の内容に関する解説

本論文は2部から構成されている。第1部は本研究の理論的側面を扱っている。第1部第1章では，宗教と社会との関係について一般的に論じた最も著名な諸研究のレビューを行う。とりわけプロテスタンティズムの倫理と近代資本主義の勃興に関するウェーバーの仮説に着目する。第2章では態度という概念の定義および，態度と信念と行動の関係について論じる。この章では，本研究の結果を解釈する際に依りどころとなる枠組（Interpretative Frame）を提示している。また，本論文の読者が文中で使用される基本的なイスラーム教の概念について理解する一助となるように，第3章ではイスラーム教について簡潔にまとめた導入部を設ける。第4章はイスラーム思想の2つの主要な原典－コーラン（Koran），ハディス（Hadith)を通じて，イスラーム教における働くことの意味について論じる。第2部は，本研究の実証的側面を扱っている。ここに含まれるのは，方法的側面および諸結果の分析である。その第1章では，本研究の方法論的側面を論じる。第2章では，宗教への関与（Involvement）と働くことの定義との関係を扱う。第3章は宗教への（イスラーム）関与と働くことの中心性との関係について述べる。第4章では，宗教への関与と働くことに関して高く評価されている機能および，目標との関係について見出された諸結果を要約する。最終章では，働くことに関する社会的規範（権利意識および義務感）について得られた結果を論じる。また，Appendix 3として，日本におけるイスラーム教徒の人口を紹介するための1章を設けた。この章の目的は，日本とイスラームの歴史的関係を明らかにすることである。また，日本にいかに伝来したかといった問も，この章で解明されよう。さらに，この章では，日本人のイスラーム教徒という集団を社会心理学的に分析しようとする試みもなされる。最後にことわっておかねばならないのは，次のことである。すなわち，本研究で用いたサンプルの代表性については，

確証することができないということである。そこでイスラーム教徒という語は，本論文では全てのイスラーム教徒を示すのではなく，本研究対象となったイスラーム教徒のみを指すのである。また，宗教という語も，第２部で用いられているように，イスラーム教のみを指すものである。

知見と結論の要約

本研究の結果は，以下のとおりである。まず，表１に示されるように，回答者が宗教への関与の度合において異なるということは明らかである。すなわち，それぞれのイスラーム教徒のサンプル（ＪＭＳ，ＩＭＳ，ＥＭＳ）において，もしくは，組み合わされたサンプル（ＣＳ）においても，３つのRINDEXのレベルは，表１に示されるように，パーセンテージ配分によるとほとんど等しい分布を示す。

さらに，予想通りに，我々はRINDEXが年齢と教育水準という個人的要因に関連している事を見出した。表１－１と図３－１に示されるように，ＣＳの中での最も高齢者層のサンプルはHRINDEXの比率が最も高く，逆に，最も若年齢者層のサンプルはHRINDEXの比率が最も低い。

SAMPLE	HRINDEX	MRINDEX	LRINDEX
JMS	34.5 *	36.4	29.1
n=110	38 **	40	32
IMS	34.9	29.9	34.9
n=120	42	36	42
EMS	33.0	35.7	31.3
n=115	38	41	36
C S	34.2	33.9	31.9
n=345	118	117	110

Table 1. Percentage and Frequency distribution of RINDEX for each sample and the Combined Sample

* Percentage ** Number of cases

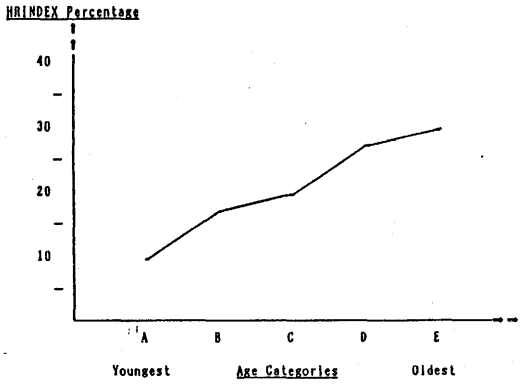

Figure 3-1. Graphic representation of RINDEX by Age Categories

Age Categories	HRINDEX	MRINDEX	LRINDEX
A. 25 -- 33	9.3	18.8	22.7
B. 34 -- 37	17.8	23.1	22.7
C. 38 -- 40	18.6	27.4	29.1
D. 41 -- 44	26.3	18.8	18.2
E. 45 -- 62	30.0	11.9	7.3

Table 1-1. Percentage of RINDEX by Age categories for the Combined Sample

Education Level	HRINDEX	MRINDEX	LRINDEX
Primary	13.6	16.2	22.7
Secondary	18.6	23.9	34.5
College	38.1	35.0	29.9
University	29.7	24.9	15.5

Table 1-2. Percentage of RINDEX by Age categories for the Combined Sample

宗教への関与と教育の水準の関連については，一般に考えられているのと違って，本研究では教育の水準が高い程，RINDEXは高くなる。（表１－２参照）。

宗教への関与と働くことの定義

回答者に，彼にとってある活動が仕事とみなせるのはどのような場合なのかについて，14の状況のリスト（質問60）のなかから，４つの状況を選択させた。

HRINDEXの回答者はLRINDEXの回答者よりも，仕事に対する態度の点で，より物質的ないし経済一志向的ではないという仮説を検証するために，これらの14の仕事の定義要素を，（要素の単純な加算によって）４つの仕事定義次元（Work Definition Dimensions)に集約して分析を試みた。すなわち，経済次元（Economic Dimension)，社会次元（Social Dimension），義務次元（Duty Dimension），そして負担次元（Burden Dimension）の４次元である。

表３－６に示されるように，仕事は，HRINDEXとMRINDEXの回答者は義務次元によって働くことを定義し，LRINDEXの回答者は経済次元を最も重視して，定義している（有意差Ｐ＜.001）。この結

Work Definition Dimensions	HRINDEX	MRINDEX	LRINDEX	C S
EWDD	19.5	20.2	40.6	26.8
SWDD	31.8	30.8	21.9	28.9
DWDD	46.2	37.5	20.9	35.0
BWDD	2.5	11.5	16.6	9.3

Table 3-6. Percentage distribution of Work Definitions Dimensions by RINDEX for the Definitional Sample (n=97)

果かHRINDEXの回答者は仕事に対して義務中心的態度をもつ傾向があるが，一方そLRINDEXの回答者はどちらかと言えば経済中心的態度をもつ傾向が見出せる。

LRINDEXの回答者で，負担次元への値がHRINDEXおよびMRINDEXの回答者よりもはるかに高いという結果は注意を払う価値がある。

宗教への関与と仕事中心性

本研究では仕事中心性の概念は，「任意の時点での，生活のなかに占める仕事の価値についての一般的な信念である」と定義される。この概念はまた，仕事への関与ということも含めている。

仕事中心性を測定するために２つの相関が高い（.72)測度を組み合わせた。第１の測度（質問18）は，レジャー，地域共同体，宗教，家族といった生活の他の領域と比較した時の仕事の相対的な重要性につ

いての測度である。第２の測度は回答者の全生活における仕事の重要性を測定するものである。これについては七段階尺度（質問19）を用いて測定した。これらの２つの測度を合わして仕事中心性測度（ＷＣＭ）と呼ぶ。

表２－４に示されるように，分析結果は，仕事の中心性に関する我々の仮説を支持するものであった。HRINDEXの回答者はLRINDEXよりも有意に（P<.001）高い仕事中心性（ＨＷＣ）をもつことが見出された。

Work Centrality		HRINDEX n=118	MRINDEX n=117	LRINDEX n=110
HWC	1	61.9	43.6	23.6
MWC	2	21.2	28.2	40.0
LWC	3	17.0	28.2	36.4

HWC = High Work Centrality
MWC = Moderate Work Centrality
LWC = Low Work Centrality

Table 2-4. Percentage Distribution of Work Centrality Score by Religious Index for each sample and the Combined Sample

宗教への関与と仕事の機能および側面

仕事の機能の重要性を測定するために，回答者に合計で100点を６つの仕事の機能（質問12の６つの項目の形で表現されている）に割り当てるように求めた。この際，その項目に同意すればするほど，より多く点を割り当てるようにと教示した。HRINDEXの回答者は表４－２に示されるように，それ自体もともと興味深く，満足感がえられる機能（本来的機能＝Intrinsic）と，社会に貢献できる機能（SOCIETY）に，最も重要な仕事の機能として，多くの点を割り当てている。これに対してLRINDEXの回答者は必要な収入（Income)がえられる機能を重視する傾向が強い。

この仕事の機能に関する評価の相違によって，HRINDEXの回答者とLRINDEXの回答者が，また仕事の側面評価においてなぜ異なっているのか（P<.001）を説明することができるだろう。

また，回答者に11の仕事の側面を提示し，最も重要なものから，最も重要ではないものまでをランクづけするように求めた。そして仕事の定義の場合に用いた方法と同様の手続で，11の仕事の側面を，次の３つの次元にまとめた。

表現性の次元，経済性の次元，適性の次元。表４－６に示されているように，HRINDEXの回答者は，LRINDEXの回答者よりも，表現性の次元を重視している（P<.01)。経済性次元におけるこれら両者の相違は，さらに大きいものである（平均順位差3.5)。LRINDEXの回答者はHRINDEXの回答者より

も高い価値を経済性の次元に与えている（P<.01)。一層大きな相違（平均順位差4.6)が快適性の次元に関して認められた。ここでもLRINDEXの回答者はHRINDEXの回答者よりも，この次元により高い価値を置いている。

WORK FUNCTIONS	HRINDEX	MRINDEX	LRINDEX
PRESTIGE-STATUS	12.0	11.0	9.9
INCOME	12.3	22.5	37.3
OCCUPYING	5.6	8.2	16.4
CONTACTS	18.3	13.8	8.4
SOCIETY	27.4	23.7	15.5
INTRINSIC	24.3	20.7	12.4

Table 4-2. Mean number of points out of 100 points assigned to work functions by Religious Index for the Combined Sample

Work Goals Dimension	HRINDEX	MRINDEX	LRINDEX
Expressive Dimension	5.2	5.9	6.9
Economic Dimension	7.3	6.6	3.8
Comfort Dimension	7.5	7.1	2.9

Table 4-6. Relative importance of work goals Dimensions by Religious Index

これらの結果は，LRINDEXの回答者はHRINDEXの回答者よりも，仕事に対する態度としては，財政的で経済的な指向性が強いという我々の仮説を支持している。

宗教への関与と仕事についての社会規範

最後に，以上のRINDEXのサブ・サンプルには，仕事に関する社会規範に対しても異なる態度が形成されていることが明らかになった。回答者に仕事についての規範に同意するかしないかを評定させた（質問34～44）。この結果から，HRINDEXの回答者は，LRINDEXの回答者よりも，義務に服従する傾向が強いことが見出された。これも我々の仮説を支持する結果である。HRINDEXの回答者は，むしろ権利への指向性が強いことが示唆された。そこで，各々の個別の質問で得られた結果を分析した後に，我々は10の項目（質問34～44）を２つの基準に集約した。すなわち，権利の基準と義務の基準である。表５－10に示されているように，RINDEXが高くなるほど，義務への指向性は増し，逆に，それが低くなるほど，権利への指向性が増すことが認められた。

Religious Index Levels	C E M		C O M	
	Agree	Disagree	Agree	Disagree
HRINDEX	51.8*	48.1	69.2	30.7
MRINDEX	58.8	40.9	66.9	33.1
LRINDEX	74.2	26.4	49.9	50.0

Table 5-10. Comparison between the RINDEX levels in respect to the Entitlement and Obligation Measures for the CS.

* Mean percentage

一般的な結論としては，この研究における一連の結果は，イスラーム教への関与の程度と一般的な仕事への態度との間に関連性があるという，我々の主要な仮説を一貫して支持しているといえる。これらの結果は，これまでの章で述べたように，人間の諸行為及び社会一般に対する宗教あるいは宗教への関与の影響を主張している機能的な理論をも支持している。しかしながら，我々は決してここで見出された結果がただちに普遍的なものであると仮定しているのではない。すなわち，現在のところ，我々はこの研究での知見は日本のイスラーム教徒のみに適用できるとするに留めておく。これらの知見をさらに検証することなく，日本以外の他のイスラーム教徒に一般化しようとすることは，誤りを招く可能性が残されているからである。イスラーム教徒の仕事への態度に関するより普遍的な理解を得るためには，他のイスラーム社会の中で，本研究で得た結果をさらに検証していく必要がある。したがって，この点において，現在の研究は未来の，そして更に完全な研究を遂行するための礎であるといえよう。

論文の審査結果の要旨

イスラム教徒の『働くことの意味』に関する実証的研究を本研究の規模で行ったものは今迄にない。

本研究はイスラム教への関与（RINDEX, Religious Index）と働くことに対する態度との関連について実証的に吟味しようとしたものである。RINDEXという概念は，被調査者のイスラム教に関する知識の程度と日常生活の中で宗教的教えを実行する程度を示すものである。イスラム教についての知識としてはコラーン（Koran）とハディース（Hadith）を用いている。

本研究の基本仮説は，RINDEXの水準によって，働くことに対する態度が異なるということである。すなわち，(1)HRINDEX（High RINDEX）の被調査者はLRENDEX（Low RINDEX）の被調査者より，働くことを社会的義務（Social Obligation）や社会への貢献（Contribution to Society）として定義するが，LRINDEXの被調査者はHRINDEXの被調査者より，これを経済的に定義する（Economic Definition）。(2)HRINDEXの被調査者はLRINDEXの被調査者に比べて，『仕事中心性』（Work Centrality）が高い。(3)働くことの機能（Work Function）として，HRINDEXの被調査者は社会への貢献を果す機能（Function permitting Contribution to Society），内発的機能（Expressive Function）を重んじ，一方，LRINDEXの被調査者は収入獲得の機能（Income Producing Function）を重んじる。(4)RINDEXの水準によって，働くことに関する社会規範（Societal Norms about Work）に対する同意の程度が異なる。すなわち，HRINDEXの被調査者は義務規範（Obligation Norms）に同意するが，LRINDEXの被調査者は権利規範（Entitlement Norms）に同意する。

これらの諸仮説を，日本在住の日本人・インド人・エジプト人男性のイスラム教徒を調査対象として，日本並びに欧米8ケ国の質問氏方式を用いた調査方式で実証した。

なお，本研究は，イスラム教における『働くことの意味』やイスラム教の経済的倫理に関するMax Weberの批判を述べている。また，日本とイスラム教との歴史的関係を述べ，現在の日本のイスラム教徒のコミュニティーを社会心理学的に分析を行なったオリジナルな知見を提示している。

本研究はイスラム教徒に関する社会心理学の研究として前人未踏のものであり，イスラム教徒を対象としたユニークな研究であり，その概念提示，実証的データ解析とその結果は学術博士の学位を授与するのに充分であると判定した。